

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13316

研究課題名(和文)衝動性が反復行動に与える影響の解明：強迫スペクトラムの観点から

研究課題名(英文) Understanding the relationship of impulsivity to repetitive behavior: from the aspect of obsessive-compulsive spectrum disorders.

研究代表者

松村 舞子(野中舞子)(Matsumura(Nonaka), Maiko)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・講師

研究者番号：30791941

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、衝動性を伴う強迫症の子どもとその保護者の支援を目指した研究を実施した。研究の結果、強迫症の家族への巻き込みと不注意傾向の関係性の深さを示した。文献レビューに基づいて有効性が想定されたオンライン心理支援プログラムの開発を行い、予備的な検討の実施によって一定程度の有効性を確認した。感覚処理の問題や気質と強迫行動の関係性の検討により、感覚処理の問題に注目する重要性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どものこだわりや不安は正常な発達過程でも確認されるため、しばしば適切な支援につながりにくく、保護者がかかわりに戸惑うことも多い事象である。低年齢児への心理支援はまだ十分に確立がなされていない我が国において、本研究全体を通して、こうした衝動制御の問題のある子どもへのかかわり方について一定程度の指針が得られたこと、今後の研究の方針が示せたことは社会的意義が大きいと考える。

研究成果の概要(英文)：This study aimed towards supporting children with Motoric obsessive-compulsive spectrum disorder and their parents. The results of this study showed (i) the depth of the relationship between family accommodation and patient's inattentive tendencies. (ii) An online psychological support program was developed, which was assumed to be effective based on a literature review, and a certain degree of effectiveness was confirmed by conducting a preliminary study. (iii) The importance of focusing on sensory processing problems and the relationship between compulsive behavior was demonstrated by examining the relationship between sensory processing problems and temperament.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：強迫症 認知行動療法 オンライン支援 子ども

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

強迫スペクトラム障害 (Obsessive-Compulsive Spectrum Disorders: 以下 OCSD) とは、何らかの衝動や考えへの「とらわれ」と、それを解消しようとして繰り返し行われる「反復行動」によって特徴づけられる疾患群のことを示す。代表的な精神障害として、強迫性障害や拔毛症、トゥレット症候群などが含まれる。強迫性障害は従来不安障害に位置付けられてきたが、生物学的な疾患理解が進むにつれて、OCSD に分類されるような「とらわれ」と「反復行動」という類似した特徴を持つ他の疾患との共通性が明らかとなり、2013年に公開された Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-5 (DSM-5) においては、不安障害ではなく、「強迫性障害及び関連障害群」として位置づけられるようになった。こうした診断基準の変更からも、OCSD の考え方は一定程度妥当性を有しているだろう。

OCSD の考え方においては、強迫性の理解と共に、「衝動性」の理解も重要となる。衝動制御の問題を抱える強迫症の代表例として、MotoricOCSD に分類されるようなチック障害や拔毛症があげられる。こうした運動系の OCSD は不安感ではなくある種の衝動が反復行動に先行していることが多い。この特徴は児童・思春期の症例においても当てはまる。こうした衝動性を伴う強迫性障害、その中でも早期に発症する対象については症状が慢性化しやすかったり、家族の巻き込みが生じやすかったり、通常の曝露反応妨害法だけの援助が難しいことが示唆されている。衝動性を伴う強迫スペクトラム症の子供とその保護者を対象とした研究は十分に実施がされていない。衝動性を伴う反復行動の持つ特徴を理解し、適切な支援が提供されることが求められる。

2. 研究の目的

以上の背景を受けて、本研究では、衝動性を伴う強迫スペクトラム障害を対象として、強迫性と衝動性の関係性の構造理解及び支援の発展をすることを目的とした。対象として、衝動制御の問題を伴いやすい児童・思春期の強迫スペクトラム症を取り上げ、子ども自身およびその保護者に有効な支援を開発することを目指した。

3. 研究の方法

本研究課題遂行中に、新型コロナウイルス感染拡大による社会的な行動制限が課せられたため、研究方法の変更を余儀なくされた。本研究課題を通して、大きく分けて3つの研究がなされた。

(1) 研究 強迫症を持つ子供の巻き込みと関係する要因の解明

A 大学附属相談室に強迫症状ないしこだわり行動への認知行動療法による援助を求めて来談した親子 10 組 (男子: 7 名, 女子: 3 名, 平均年齢: 13.3 歳 [SD=2.8]) を対象とした。併発症は自閉スペクトラム症者 3 名, 注意欠如多動症 3 名, チック症 1 名, 醜形恐怖 1 名であった。通常の心理過程で実施される心理アセスメントの結果や経過について、二次利用することに同意を得るという形式をとった。来談後 2 回目ないし 3 回目に、担当者以外の研究者が研究の概要について説明し、書面にて同意を得た場合にのみ、解析の対象とすることとした。なお、本研究の概要は事前に HP にて周知する配慮をとった。解析対象となる評価項目は、強迫症状 (CY-BOCS: Children's Yale-Brown Obsessive Compulsive Severity Scale)、自閉スペクトラム症傾向 (PARS-TR: Parent-interview ASD Rating Scale-Text Revision 短縮版)、反復行動 (RBS-R: Repetitive Behavior Scale-Revised)、子供の行動上の問題 (CBCL: Child Behavior Check List)、ADHD 傾向 (ADHD-RS: ADHD-Rating Scale)、家族の巻き込み (FAS: Family Accommodation Scale (Pinto et al., 2013; Kobayashi et al., 2017))、精神的健康 (K6 (Kessler et al., 2002; Furukawa et al., 2008))、精神的健康度 (WHO-5 (Awata et al., 2007)) であった。

(2) 研究 幼少期の子供の強迫症へのオンライン支援の開発

研究開始当初は研究の結果を受けて、A 大学附属心理教育相談室において親子を対象としたプログラム開発を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大により、対面での心理援助に制限が生じた。例えば、A 大学附属心理教育相談室は半年間休室となり、研究のためのプログラムの開発や研究の継続は難しい状況となった。

そのため、研究を通して巻き込みをはじめとした母子相互作用に注目する必要性があると考え、以下の研究を行った。第一に文献レビューを行い、就学前という低年齢児を含む幼少期の強迫症への心理支援についての先行研究を概観した。その結果、3-8 歳という低年齢児に対する Family-Based CBT の重要性を確認するとともに、オンライン下でも有効な可能性を確認することができた。先行研究を参考にしながら、オンラインで実施可能な合計 10 回の認知行動療法のプログラムを開発した (表 1)。研究紹介のホームページも作成し、シンポジウムでの発表と合わせての研究告知も行った。問い合わせがあった 13 名のうち、研究参加の条件と合致し、親子ともに同意が得られた 9 組の親子にオンライン認知行動療法を実施し効果を検討した。評価指標として、CY-BOCS、子どもの強さと困難さのアンケート (SDQ)、CBCL を実施したほか、アセスメントのために感覚プロファイルも取得した。

表1. プログラムの構成

	親	子	内容及び評価指標
1	○	-	主訴, 子どもの特徴の聴取, 既往歴や現在の症状などの確認 症状評価の実施 (方法欄参照)
2	○	○	強迫症状/こだわりの心理教育, 困っていることの階層表を作る。気持ちのモニタリング (HW)
3	○	-	CF の共有。巻き込みの心理教育・対処方法について 保護者の気持ちのモニタリング (保護者の HW)
4	○	○	症状への対処方法を共有 : 曝露反応妨害法/認知的方略/リラクゼーション
5	○	-	巻き込みを減らす声かけ。足場づくりの紹介。 トラブル・シューティング
6	○	○	症状への対処方法を共有 : 曝露反応妨害法/認知的方略/リラクゼーション/再発予防
7	○	-	振り返りと再発予防。(保護者向け)
8	○	○	振り返りと再発予防。(子ども向け)
9	○	○	症状変化の確認
10	○	-	フォローアップ

*第8, 9 回目の子どもの面接は ID.04 までの全員が子供との面接を増やすことを希望したため追加。
*第8, 9 回目は隔週、第10 回目は1 か月以上後の希望するタイミングに実施した。

研究 こだわり行動と感覚処理特性と気質の関係性の検討

研究を通して、感覚処理特性をアセスメント項目に含むことの重要性が示された。その中で、反復行動や強迫症の背景に感覚処理特性がどのように影響しているのかに着目する必要があると考え、203 名の3 - 8 歳の子どもを持つ保護者を対象に2 時点の縦断調査を実施した。調査項目は、子どもの行動抑制傾向(日本語版子どもの行動抑制尺度, 高橋他, 2021), 子どもの強さと困難さのアンケート(Strength and Difficulties Questionnaire), 反復行動についての調査(RBS-R, Inada et al., 2015), 感覚プロフィール短縮版, 基礎情報であった。

4. 研究成果

(1) 研究の結果(野中他, 2021)

事例の特徴の解析から、巻き込みが強いグループは不注意傾向も高い特徴がみられたため分布を確認したところ、群分けをして検討するのが適切だと考えられた。巻き込みの強弱で2 群に分けて検討したところ、精神的健康度や強迫症状そのものには有意な差がみられなかったが、CBCL で測定される社会性の問題と思考の問題に有意に差がみられた。また、巻き込みが強い群は強迫行為の種類も多様であった。強迫症と不注意傾向の関係性は発達障害の併発事例であるという説のほか、強迫症状による認知的負荷により不注意傾向が高まるという Executive Overload Model (Abramovitch et al., 2012) という仮説も提唱されている。また、不注意傾向と保護者の巻き込み行動の関係性のプロセスは解明されていないため、質的調査を交えた検討が望まれる。

(2) 研究の結果(野中, 2019. 野中・下山, 2022, Nonaka et al., 2023)

方法に記載した通り、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け研究計画の変更を迫られたため、まずは文献レビューを行い、幼少期の強迫症への支援の今後の方針を示した(野中, 2019)。その結果、たとえ低年齢児を対象としても、Family based CBT が有効である可能性とともに、わが国において類似の研究が不足していることを示唆した。こうした限界を受けて、3 - 8 歳の子供を対象とした全10 回で構成される認知行動療法プログラムを作成し、ホームページを作成して広報をし、参加希望があった親子11 名のうち、最終的な評価まで終了した7 名を対象としてその効果を検討した(野中・下山, 2022, 図1)。

結果として、強迫症状、CBCL で測定される情緒や行動上の問題の軽減を確認した。また質的な記述としても、「一人でトイレに行けるようになってよかった」「食べたいけれど食べられなくなったお餅を食べられるようになってよかった」など、不安への対処スキルの向上が確認された。また、比較的長期的な予後の報告があった1 事例についても検討し、成長するにあたって不安や強迫症状が増大した時に、家族が共通して対処するスキルを身に付けていることの重要性も確認された(Nonaka et al., 2023)。子どもの強迫症への認知行動療法を実践している機関はわが国では

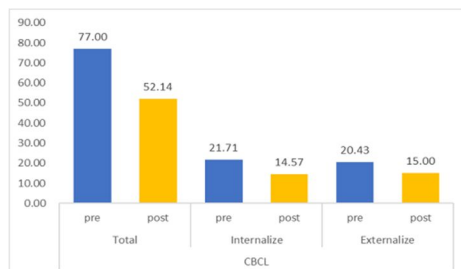


図1. CBCL の変化 (野中・下山, 2022)

限られており、低年齢児を対象とした実践はほとんど報告されてこなかった。オンライン下であっても、低年齢児への認知行動療法の有効性が確認されたことは、心理支援を多様な地域・環境

の家庭に提供できるという意味で社会的インパクトが大きい知見である。

(3) 研究の成果

2時点目に回答したものと回答していないもので基礎属性に差がないか検討し、基礎属性や評価尺度の得点に有意差がないことを確認した。2時点目まで回答があった143名のうち、ASDまたはADHDの診断を有していた8名を除外した135名を対象として、第一時点の相関係数を検討したところ、子育てにおける全般的な困難度は、こだわり行動・感覚処理の障害・行動抑制傾向と有意な相関関係が確認された($r = .45, .72, .304, p < .001$)。こだわり行動と感覚処理の障害も有意に相関していた($r = .522, p < .01$)。SDQによる全般的困難度を従属変数として、ステップワイズの重回帰分析を行った結果、感覚処理の障害($\beta = .69$)と行動抑制傾向($\beta = .12$)が残存した($R^2 = .53$)。同様の相関傾向は2時点目でも確認されたが、2時点目ではこだわり行動の影響も一定程度確認された($R^2 = .43$ 、感覚処理の問題： $\beta = .45$ 、こだわり行動： $\beta = .21$ 、行動抑制傾向： $\beta = .199$)。交差遅延効果モデルによって因果関係の推定を行ったが、時点間では同変数同士でしか有意ではなく、因果関係の推定はできなかった。

こだわり行動の出現頻度自体が定型児であれば少ないため、そうした分布の偏りも考慮した分析を行い、今後論文投稿していくことを計画している。

以上3つの研究を通して、子どもの強迫症における併発症特性と巻き込みの問題、そして巻き込みの問題を含めたオンライン認知行動療法の有効性の示唆、感覚処理障害の影響を含めた検討が必要だという展望を示したことにより、当初の目的であった強迫性と衝動性の関係性の理解と強迫症への支援の発展に向けた知見の提供を一定程度達成したと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 野中舞子・金生由紀子	4. 巻 63
2. 論文標題 こだわりが強い・変化が苦手	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小児科	6. 最初と最後の頁 1245-1249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 野中舞子	4. 巻 39
2. 論文標題 幼少期の強迫性障害に対する認知行動療法を巡る文献展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 461 - 471
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Goto Ryunosuke, Matsuda Natsumi, Nonaka Maiko, Hamamoto Yu, Eriguchi Yosuke, Fujiwara Mayu, Suzuki Akane, Yokoyama Yukari, Kano Yukiko	4. 巻 12
2. 論文標題 The Gilles de la Tourette Syndrome-Quality of Life Scale (GTS-QOL): A Validation in Japanese Patients	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychiatry	6. 最初と最後の頁 797037
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsy.2021.797037	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 野中舞子・下山晴彦	4. 巻 32
2. 論文標題 強迫と認知行動療法	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 544-548
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 野中舞子・下山晴彦
2. 発表標題 幼少期の強迫症状及びこだわりに対するオンライン認知行動療法プログラムの開発と効果の予備的検討
3. 学会等名 日本認知行動療法学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kano, Y., Hamamoto Y., Nonaka, M., Matsuda N
2. 発表標題 Tic disorders including Tourette syndrome in Asia
3. 学会等名 The 15th World Congress of IACAPAP (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野中舞子・片岡優介・一柳貴博・下山晴彦
2. 発表標題 子どもの強迫性障害における巻き込みと発達特性の関係について
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松田なつみ・野中舞子・鈴木茜音・藤原麻由・金生由紀子
2. 発表標題 トゥレット症に特有なチック症状と強迫症状を測定する自記式尺度の信頼性・妥当性の予備的検討
3. 学会等名 日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nonaka M., Matsuda N., Kono T., Fujio M., Nobuyoshi M. & Kano Y.
2. 発表標題 Development of Distress About Tics Scale- Parents Version: Preliminary Analysis of Reliability and Validity.
3. 学会等名 AACAP 's 65th Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nonaka M.
2. 発表標題 The long-term effect of Cognitive behavioral therapy via Internet for preschool obsessive compulsive disorder: a case study.
3. 学会等名 The 11th Congress of the Asian society for child and adolescent psychiatry and allied professions (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------